シリーズ 第68回

薪森原人形 芝居の新知見

平成二十七年十月三十一日から十一月二十九日まで、徳島県立博物館において、企画展「阿波木偶箱まわしの世界」が開催され、その中で鏡野町の薪森原で戦前まで使用されていた人形芝居の道具が展示されました。この企画展に先立ち、平成二十六年十月に芝原生活文化研究所・阿波木偶箱まわし保存会・徳島県立博物館の皆さんによって、鏡野町所蔵の人形芝居資料の詳細な調査が実施されこれまで地元の伝承等からはわからなかった新知見が明らかになりました。

櫃（赤丸の箇所が箱廻しの針金の環）

薪森原の人形芝居については、平成二十五年三月号の広報でも紹介しましたが、江戸時代頃に地元の青壮年によって人形芝居の一座が結成されました。明治時代後期頃になると盛んになり、一座は「住吉座」と名付け、大阪の人形師・大江順の人形の頭を入手して戦前まで近郷各地で披露され好評を博していたということでした。

鏡野郷土博物館に残る資料や地域に残る言い伝えや過去の記録からは、三人で一体の人形を操り芝居を演じる三人遣いの人形浄瑠璃が行われていたことがわかりますが、今回の調査において、人形や衣装を入れる木箱「櫃」の側面に付いていた針金の環が、数体の人形を一人の人形遣いが交互に操る「箱廻し」を行う際に、遣っていない人形を掛けて置く竹を挿し込み固定するためのものであることが判明し、この針金の環の存在によって箱廻しも行われていたことがわかりました。

婆頭と内側に書かれた「鳴州」の文字

また、人形頭はこれまでは大江順の作品のみが明らかでしたが、今回の調査では老婆の人形の頭「婆頭」の内側に、「鳴州」の文字が確認されました。鳴州とは、現在の鳴門市生まれで、徳島市藍場町で人形を製作し、文化三年（一八〇六）に亡くなったといわれる人形師の名前です。鳴州の作品とされる人形は、この婆頭を含めて国内で九例しか確認されておらず、徳島県以外からは三例目という貴重な発見となりました。

この他にも、寄人の頭には「イヨ松山／義豊」の墨書があり、安政六年（一八五九）に亡くなった伊予国（愛媛県）の人形師・二代目面光の作品であることもわかり、これまで明らかではなかった江戸時代の人形頭をいくつか確認することができました。

二代目面光作　寄人

こうしたことから、薪森原の人形芝居は、記録に残されている三人遣いの人形浄瑠璃のみではなく、一人遣いの「箱廻し」も行われていたことがわかります。箱廻しは阿波国（徳島県）の芸人が全国各地に巡業して広がっていったものですが、薪森原にある最も古いと思われる婆頭が江戸時代中期の阿波国の人形師・鳴州の作であることと合わせれば、阿波国の箱廻しや人形浄瑠璃から端を発する可能性が高いと思われます。その後大阪の文楽などからの影響も受けながら稽古を重ね、道具を揃え、代々伝えられてきたのでしょう。

今回の調査では、薪森原の人形芝居だけでなく、阿波の人形文化研究の観点からも新しい発見があり、今までと違った視点から地域を観察することで、埋もれた歴史が新たな輝きを放って発見される可能性が示されました。

参考資料：『「阿波木偶箱まわし」伝承推進事業報告書』、『阿波木偶箱まわしの世界―門付け、大道芸―』、『美作の民俗』

指　導：庄武憲子

生涯学習課　日下
電話（0868）54-7733

〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/